

プラチナ・シリーズに寄せて

大谷 康子

欧米のヴァイオリニストたちは日本のヴァイオリン界の発展に大きなインパクトを与えてきましたが、その中でも「ルドルフ・ディットリヒ」「ヤッシャ・ハイフェッツ」「フリッツ・クライスラー」「ダヴィッド・オイストラフ」の4人は特筆に値するでしょう。

ディットリヒはお雇い外人教師として東京音楽学校(現在の東京藝術大学)に赴任し、幸田延をはじめ、多くの音楽家を育てました。ハイフェッツ、クライスラーは蓄音機が日本に普及する頃に来日し、日本の聴衆を魅了し、録音文化の醸成に多大な貢献をしました。オイストラフは1955年に初来日しました。東西冷戦中の来日は奇蹟的な招聘として今でも語り草になるなど大きなインパクトを与えました。1967年の再来日では、この東京文化会館でもリサイタルを行ないました。

2024年がダヴィッド・オイストラフの没後50年にあたることにちなみ、私の憧れでもあるオイストラフへのオマージュを込めてプログラムを構成しました。

私は2025年にデビュー 50周年となりますが、今回、イリーナ・メジャーエワさんと共演する機会をいただきましたので、ロシアのヴァイオリン音楽を改めて勉強し直し、さらなる成長への糧としたいと思います。

曲目解説

伊藤 裕太 (音楽プロデューサー)

プラチナ・シリーズ第5回では、ロシア音楽史の中で節目となるような作曲家たちの作品で、とりわけ日本で演奏される機会の少ないヴァイオリン音楽の名曲の数々が演奏されます。

セザール・キュイ César Cui (1835～1918) / ヴァイオリンとピアノのためのソナタ 二長調 Op.84

キュイは作曲家であり、音楽評論家であり、また軍人でもありました。19世紀初頭のナポレオン戦争の仏軍の敗走兵でロシアに居残った父とリトアニア人の母を持つキュイは、軍人として後にロシア軍の工兵大将の地位にまで昇りつめました。14歳で作曲を始めた彼の音楽は、バラキレフと出会って以降、真剣な「二足のわらじ」となっていき、いわゆるロシア音楽の「五人組」のひとつとなりました。

キュイの作曲経歴上の特徴としては交響曲や交響詩がないことであり、オペラを10曲作曲し、多数の歌曲を遺しています。

作品84のヴァイオリンソナタはキュイが唯一作曲したヴァイオリンソナタで、1860年頃のスケッチは残っているものの、60年代はオペラの作曲に注力したためか、完成は1870年のこととなりました。出版はさらに遅れ、1911年のことでした。

第1楽章：アレグロ / 第2楽章：アンダンテ ノントロポ(過度にならないように) / 第3楽章：アレグロ

セザール・キュイ César Cui (1835～1918) / 『万華鏡』 Op.50より 第9曲「オリエンタル」

キュイの「オリエンタル」作品50-9は、1893年に作曲された『万華鏡』(ヴァイオリンとピアノのための24の小品集) Op.50 の第9番目の曲(アレグレット 6/8拍子 ト短調)です。メロディはセルビア民謡「明るい太陽」から採られています。「明るい太陽」は同時代のロシアの作曲家たちに人気で、チャイコフスキーの「スラブ行進曲」やリムスキー＝コルサコフの「セルビア幻想曲」でも用いられています。演奏時間は約2分と短いですが、キュイの作品中、最も有名なもののひとつです。

ニコライ・カルロヴィチ・メトネル Nikolai Karlovich Medtner (1880 ~ 1951) / ヴァイオリンとピアノのためのソナタ第1番 口短調 Op.21

メトネルは18世紀にはロシアに移住したドイツ系の両親のもとに生まれました。彼は1917年のロシア革命後しばらくして、演奏旅行を理由に出国し、亡命の意図はなかったものの、祖国に戻ることはありませんでした。1925年にパリに定住しましたが、フランス楽壇とは馴染めず、1936年以降はロンドンで暮らしました。

メトネルは3曲のヴァイオリンソナタを作曲しました。一番有名な曲は第3番(「エピカ」作品57 1938年作曲)ですが、今回は第1番が演奏されます。第1番は1909年から1910年ごろの作品で、1911年に出版されました。

本日のピアニストのイリーナ・メジャーエワさんはグネーシン音楽大学でウラジーミル・トロップに師事しました。師の薦めもあってメトネルのピアノ音楽を精力的に紹介してきました。ピアニストでもあったメトネルのこのソナタはヴァイオリンの伴奏をするというよりもお互いに呼応しあって展開していく作曲法です。

第1楽章 Canzona / 第2楽章 Allegro scherzando / 第3楽章は Dittiramboと名付けられていて、しかも Festivamente という決め打ち (festivamente は humorously とか joviallyの意)、そして4分音符で66 ~ 72という指定がある。

ミリイ・アレクセエヴィチ・バラキレフ Mily Alekseyevich Balakirev (1837 ~ 1910) / ヴァイオリンとピアノのための即興曲 ホ長調

バラキレフは母親からピアノを習った後、ジョン・フィールドの弟子アレクサンドル・デュビュークに師事しました。ジョン・フィールドは『近代ロシア音楽の父』と呼ばれることになるミハイル・グリンカを指導し、ロシア音楽の発展にとでも寄与した作曲家です。デュビュークはフィールドに忠誠を尽くした人でした。バラキレフは「もし私がピアノを弾くことができているのだとすれば、それは全てデュビュークから受けたレッスンのお蔭である。」と語ったそうです。

バラキレフはいわゆる「ロシア五人組(バラキレフ・キュイ・ムソルグスキー・リムスキー＝コルサコフ・ボロディン)」のまとめ役として知られています。1862年にはキュイらと共に無料音楽学校を設立します。また1869年には帝室宮廷礼拝堂の監督と帝国音楽協会の指揮者に任命されます。ロシア音楽のまとめ役としてのバラキレフに、チャイコフスキーも助言や批評を仰ぎました。1870年代からは精神的に一時落ち込んだ時期もあったそうですが、1880年代になって創作意欲を取り戻し、大作を完成させていきました。

ヴァイオリンとピアノのための即興曲は1907年の作曲、バラキレフ最晩年の曲です。本日のリサイタルのサブタイトル「ヴァイオリンが歌う、至福の叙情詩」にふさわしい甘く美しくメランコリックな旋律で始まります。

ドミトリー・ドミトリエヴィチ・ショスタコーヴィチ Dmitri Dmitriyevich Shostakovich (1906 ~ 1975) (H.グリックマン編曲) / 3つの幻想的舞曲 Op.5

今年は1974年にダヴィッド・オISTRAフが亡くなってから50年の節目となります。ダヴィッド・オISTRAフは平和条約が締結される前の旧ソ連からのアーティストとして1955年に初めて来日し、大きな話題となりました。1967年・1969年にも来日し、東京文化会館で10回ほど協奏曲とリサイタルのコンサートを行ないました。(67年の来日時のモスクワフィルとの録音が残されていて、ショスタコーヴィチのヴァイオリン協奏曲第1番を聴くことができます。) 3月25日夜の大ホールでのリサイタルではシューベルト、ベートーヴェン、ドビュッシーなど5曲を演奏しました。伴奏はフリーダ・パウエルでした。

PROGRAM NOTE

本日のプログラムには、大谷康子さんのオイストラフへのオマージュを込めて、その3月25日のリサイタルで演奏されたショスタコーヴィチの「3つの幻想的舞曲 Op.5」が取り上げられました。

ブラチナ・シリーズを鑑賞されるお客様にショスタコーヴィチについては改めて説明する必要はないでしょうが、彼は共産主義下のソビエト連邦を代表する作曲家としてだけではなく、20世紀最大の作曲家のひとりと言ってよいでしょう。15曲の交響曲、15曲の弦楽四重奏曲を筆頭に、ピアノ・ヴァイオリン・チェロの協奏曲を2曲ずつ、オペラ・合唱曲・室内楽曲など膨大な作品を遺しました。大谷康子さんが第1ヴァイオリンを務めるクワトロ・ピアチェーリは2005年秋から弦楽四重奏曲の全曲演奏に取り組み、2010年には文化庁芸術祭大賞受賞の榮譽に輝きました。

「3つの幻想的舞曲 Op.5」はショスタコーヴィチがレニングラード音楽院の学生であった1920年12月4日に作曲された最初期の作品で、4分程度の小品です。元はピアノ用にかかれた曲ですが、いろいろな編曲があり、彼自身も自分のコンサートのプログラムに入れて演奏していたそうです。それぞれ1分30秒ほどの3つの短い曲 第1曲 行進曲／アレグレット、第2曲 ワルツ／アンダンティーノ-アレグレット、第3曲 ポルカ／アレグレットから構成されています。

ニコライ・アンドレイェヴィチ・リムスキー＝コルサコフ Nikolai Andreyevich Rimsky-Korsakov (1844～1908) (L.バイチ、M.フレッツベルガー編曲) / 『シェエラザード』 Op.35

リムスキー＝コルサコフもまたキューと同様に軍人でした。18歳で海軍に入り、水兵としてニューヨークにも航海しました。彼は6歳の時からピアノを習い、10歳の時には作曲も始めていたようですが、その頃は音楽よりも文学に興味を示し、まだ見たこともない海に憧れを抱くようになったようです。17歳の時にバラキレフと出会います。バラキレフは彼をキューやムソルグスキーなど後の「五人組」の同人に引き合わせました。バラキレフの指導を得ながら、「ロシア人による前代未聞の交響曲」と評された交響曲第1番は海軍時代に作曲され、音楽を副業とする状態は海軍を退役する29歳の時、1973年まで続きました。退役前の1871年にはペテルブルク音楽院の作曲と管弦楽法の教授に任命されました。彼にはロシアの民謡・文学を題材にした作品が多く、色彩感のある管弦楽法の大家としても知られ、教科書も書いています。教師としての声望も高く、グラズノフ、ストラヴィンスキーを筆頭にリヤードフ、アレンスキー、プロコフィエフなどを育てました。スクリャーピンは彼に終生助言を求め、ラフマニノフも交響詩を献呈しています。シベリウスやレスピーギなどの国外の作曲家たちからも尊敬されていました。

44歳の時に書かれた交響組曲「シェエラザード Op.35」は千夜一夜物語(アラビアンナイト)の語り手であるシェエラザードの物語を題材としています。作曲者自身により編曲されたピアノ4手版やクライスラー編曲のヴァイオリンとピアノ版などがありますが、今回はバイチ&フレッツベルガーによる2011年の編曲版が演奏されます。大谷康子さんは長く在京のオケのコンサートマスターを務めてきましたが、この「シェエラザード」での甘美かつ妖艶なソロは楽壇でも定評がありました。本日のバイチ版ではソロヴァイオリンパートだけでなくオケ全体の他の楽器のパートを演奏する場面もあるので楽しみですね。

バイチ&フレッツベルガー版は5楽章から構成されていますが、第4楽章と第5楽章は連続して演奏されますので、4楽章から成る原曲と同じ構成です。

第1楽章 海とシンドバッドの船、第2楽章 カランダール王子の物語、第3楽章 若い王子と王女、第4楽章 バグダッドの祭り、第5楽章 海。船は青銅の騎士のある岩で難破。